

『あらし』

——再生の場としての島——

宮之原 匡 子*

シェイクスピアのパストラル・コメディには主要な登場人物が都市や宮廷から一旦離れ、日常の世界と隔絶した場で一定の時を過ごすことによって、精神的成長を遂げることになるというテーマがある。ロマンス劇とも呼ばれるシェイクスピア最後の喜劇『あらし』においてもやはり同じようなテーマが見られる。¹⁾この作品は、嵐で始まり、この嵐を起こしたプロスペローの支配する絶海の孤島が唯一の舞台となり、プロットが展開していく。

近年、このロマンス劇を新歴史主義批評やポストコロニアリズム批評のスタンスで論じるという傾向が優位を占めている。²⁾シェイクスピアは、1609年の夏、植民者を率いて新大陸へ向かっていたイギリスの船シー・アドヴェンチャー号がバーミューダー諸島の沖で嵐に遭遇し、無人島に漂着したという出来事を利用し、1611年の秋にはすでに『あらし』を書いていたと考えられる。この遭難の話は、バーミューダ・パンフレットや、その一行の一人のウィリアム・ストレイチーの書いた手紙に記録されており、当時の人々にはよく知られていたと言われる。³⁾それ故、登場人物たちが上陸する孤島は、当時の人々に新大陸を彷彿とさせたことだろう。確かに、先住民キャリバンに西洋文化を押し付け、労働力を搾取し、反抗する場合には罰を与える、新大陸へ到着した植民地支配者としてプロスペローを見、そして、植民地化主義的政治イデオロギーの悲劇的な犠牲者としてキャリバンを扱っている、と見ることもできる。このような批評も大変参考になり、また、同調したい部分もある。しかし、最後には孤島にキャリバンを残し、ミラノに帰国するプロス

*本学文学研究科博士後期課程

キーワード：孤島，試練，浄化，精神的成長，調和

ペローに植民地支配者としての姿を、また、ミランダを凌辱しようとしたキャリバンに犠牲者としての姿を、私は感じる事が出来ない。

シェイクスピアは、この孤島を、植民地としてとらえるのではなく、何か不思議な力を秘めた世界として、人間を改心させ、再生させる期待をもたらす場と考えていたのではないか。シェイクスピアは、『あらし』においては島を唯一の舞台として設定することによって、作品の重要な要素として島を強調したように思われる。

野島秀勝氏は「シェイクスピアの劇作家としての生涯は牧歌にはじまって牧歌に終わったとっていい」と述べている。⁴⁾それほど、喜劇に限らず、『リア王』などの悲劇においても見られるように、牧歌的緑の世界のアーデンやアセンズ近くの森や、嵐の吹きすさぶヒースの荒野（ただし反牧歌的世界として）などという場所が登場人物に強い影響力を与えることが示唆されている作品が多いのである。『あらし』においては、『夏の夜の夢』や『お気に召すまま』の主要な舞台となっている森と同じ役割を果たしているのがプロスペローのいる孤島なのである。妙なる音楽が満ちあふれ、エーリアル、妖精たちや、キャリバンがいる非日常の世界であるこの島は、プロスペローがミランダを純粹無垢な素晴らしい女性へと成長するよう養育する場であるだけでなく、恋人たちには、忍耐力や献身の心を、プロスペロー自身には宿敵をも許せる程の自制心や寛容さを、そして、彼を陥れ、追放した人物たちには、例外はあるものの、改悛の情をもたらすという精神的成長を促す再生の場であるということを、作品に沿って、考察していきたい。

1.

開幕早々、稲妻を伴って雷鳴が鳴り響く。嵐が吹きすさび、荒波に翻弄される船の様子が描かれる。船上の怒鳴り合う声や叫び声も聞こえて来る。この嵐は『リア王』の荒野に吹き荒れる嵐の延長の様に思われる。リアは国土も支配・行政権も譲り与えた実の娘たちの残酷な仕打ちによって、嵐の荒野をさまようことになる。『リア王』において、荒野の嵐は自然界の嵐・ブリ

テン王国の嵐であるとともに、リアという小宇宙である人間のなかに吹き荒れる心の嵐をも表していた。『あらし』では、十二年前ミラノ大公プロスペローが実の弟アントーニオーによって大公の地位を篡奪され、追放されるという、自然の秩序が破壊された状況がみられる。そして、その陰謀に関わった人物たち一行の乗った船が、嵐に遭遇する。自然界の嵐の中では権威というものが何の役にもたらず、高官が水夫長にさえ「この荒れ振りの凄まじさだ、王様の前だからといって気兼ねするとでも思っているんですか？」(1.1.16-17)とやりこめられてしまう。⁵⁾この作品では、嵐は、弟のあるまじき仕打ちに対してプロスペローの心に吹き荒れた嵐であると同時に、階位秩序の混乱を象徴する嵐であり、また、権威や権力の通用しない場である島へと至る通過点として扱われている。王侯や廷臣たちは、海上の嵐に翻弄されたあと、異界の地である絶海の孤島に上陸する。

この嵐が実はプロスペローが魔術で起こしたものであり、この島は十二年前彼とミランダが漂着した島であることがミランダへの説明によって明らかになる。

アントーニオーはプロスペローの血肉をわけた弟でありながら、大公の地位を奪うためには手段を選ばない。彼はナポリ王国への従属を条件に、兄を裏切り、ナポリ王アロンゾーと結託して、ミラノ大公の地位を篡奪したのである。アロンゾーは、ナポリ王国の王という最も高い地位にありながらも、まだ、あくなき権力欲や物質欲に取り付かれていた。このような人物達に対して、「書齋があれば、それで領地は十分」(1.2.109-110)という程、権力や権威というものに執着せず、政務を怠り、魔術の研究に没頭してしまったプロスペローが太刀打ちできるはずはない。

... by being so retir'd,

O'er-priz'd all popular rate, in my false brother

Awak'd an evil nature; and my trust,

Like a good parent, did beget of him

A falsehood in its contrary, as great
As my trust was; which had indeed no limit,
A confidence sans bound. (1.2.91-97)

彼は、弟を信じ切って、国政を一切任せて、その責務をないがしろにし、本来大公として自分が果たすべき役割を果たさなかった。弟の権力への野心を増大させ、ミラノの秩序を乱すもとの原因をつくったのは、プロスペロー自身なのである。そしてそのことを彼は今、自覚し、反省している。

プロスペローはこの島に漂着以来、白魔術の研究を深め、嵐を起こすことができる程、自然を自由に支配し、妖精を意のままに操ることができる力を獲得した。

... I have bedimm'd
The noontide sun, call'd forth the mutinous winds,
And 'twixt the green sea and the azur'd vault
Set roaring war: to the dread rattling thunder
Have I given fire, and rifted Jove's stout oak
With his own bolt; the strong-bas'd promontory
Have I made shake, and by the spurs pluck'd up
The pine and cedar: graves at my command
Have wak'd their sleepers, op'd, and let'em forth
By my so potent Art. (5.1.41-50)

このような力を獲得することが可能になったのもこの島においてである。

この絶海の孤島での十二年もの長い間、彼は自分を陥れた宿敵に対して激しい憎しみをもち続ける一方、彼らを許そうとする心も芽生え、その間を揺れ動いていたのではないだろうか。ただ復讐をするためなら、嵐で船を転覆させてしまうことができたはずである。たまたま彼の島の近くを通りがかつ

たアロンゾーをはじめとする一行が乗っている船を魔術でおびき寄せ、島に無事に上陸させたのは、この魔法の島が彼らを改悛させ、再生させることができる不思議な浄化作用を持っているからである。

2.

島で白魔術の研究を続ける一方、プロスペローは十二年間娘のミランダの養育にも心を注いできた。

Have I, thy schoolmaster, made thee more profit
Than other princess' can, that have more time
For vainer hours, and tutors not so careful. (1.2.172-174)

学識豊かなプロスペロー自身が教師となり、最良の教育をし、十二年という長い歲月、手塩にかけて彼女を慈しみ育てて来た。彼女は宮廷から遠く離れた、絶海の孤島という環境で、父以外の人間を見ることもなく、そして、宮廷生活における虚飾、陰謀、野望などを身近に経験することもなく、素直な、純粹無垢な乙女として成長する。

ミランダは、嵐に翻弄されている人々の恐怖を自分のことのように感じとる。

If by your Art, my dearest father, you have
Put the wild waters in this roar, allay them.
The sky, it seems, would pour down stinking pitch,
But that the sea, mounting to th'welkin's cheek,
Dashes the fire out. O, I have suffered
With those that I saw suffer! a brave vessel,
(Who had, no doubt, some noble creature in her,)
Dash'd all to pieces. O, the cry did knock

Against my very heart! Poor souls, they perish'd! (1.2.1-9)

このように、嵐を鎮めてくれるよう父に嘆願するほど、ミランダは実に優しく、同情心に富んでいる。ラテン語 *miran* に由来し、「驚異」「驚嘆」という意味を含む名前を持つミランダは、アロンゾーとファーディナンド親子に二度も “goddess” (1.2.424/5.1.187) と呼ばれ、“So perfect and so peerless, are created / Of every creature’s best!” (3.1.47-48) と褒めたたえられるほど、素晴らしい女性である。プロスペローにとっては流された孤島で絶望にくじけそうになる時に生きる力を与える “cherubin” (1.2.152) 守護天使のような存在である。

There’s nothing ill can dwell in such a temple:

If the ill spirit have so fair a house,

Good things will strive to dwell with’t. (1.2.460-462)

見た目の美しいものには正しい心が宿る。これはミランダがファーディナンドを見て言ったことばであるが、まさしく彼女にあてはまることである。彼女はプロスペローが作り上げた、外観と内実が一致する理想像なのである。そんな彼女がファーディナンドと出会い、自分の愛情を素直に表現する。そして、彼と一目で恋に落ちることによって、献身的で、より素敵な女性へと成長していく。

エーリアル音楽に導かれて、ミランダに出会ったファーディナンドは、プロスペローの「手軽に得た宝は必ず手軽にあしらわれる」(1.2.454-455) という思いから、ミランダから引き離され、首と足に枷を掛けられ、キャリバンの仕事であるいやしい丸太運びをするという試練を与えられる。ミランダへの愛情を胸に、試練に耐えることによって、王子という身分に対して持っていたプライドは消え、ミランダへの献身の心へと変わっていく。そして、囚われの身においても自由を見いだしていく。

My spirits, as in a dream, are all bound up.
My father's loss, the weakness which I feel,
The wrack of all my friends, nor this man's threats,
To whom I am subdued, are but light to me,
Might I but through my prison once a day
Behold this maid: all corners else o'th'earth
Let liberty make use of; space enough
Have I in such a prison. (1.2.489-496)

この島は、ミランダを理想的な女性に育てるための、そして、ファーディナンドを理想的な為政者とする精神を育むための教育の場として機能している。試練を乗り越えることによって、二人はお互いの愛情をいっそう深めていく。そして、“Fair encounter / Of two most rare affections!” (3.1.74-75) とプロスペローが喜ぶように、島におけるこの二人の結びつきが、将来 “brave new world” (5.1.183) が誕生するという期待を可能にするのである。⁶⁾

3.

島の中では、エーリアルが奏でる厳かで、妙なる音楽が聞こえている。エーリアルはこの音楽で人々を誘導し、眠らせ、また、目覚めさせもする。プロスペローが「厳かな調べだ、これに優る慰めは他にあるまい、狂った想いを鎮め、病める脳の働きを癒してくれよう」(5.1.58-59) と言っているように、ファーディナンドに聞こえてくる音楽は、「決してこの世のものではない」(1.2.409-410) ものに聞こえ、父の死を嘆く彼の苦しみを鎮める役割をしている。⁷⁾プロスペローによる教化を拒否し、悪態をつくだけでなく、逆に、トリンキュローとステファノーにプロスペロー暗殺をそそのかすというような行動をとるキャリバンでさえも、音楽や歌の調べを聞いて浮き浮きしたり、眠気を催し、夢を見ることもできる。

... the isle is full of noises,
Sounds and sweet airs, that give delight, and hurt not.
Sometimes a thousand twangling instruments
Will hum about mine ears; and sometime voices,
That, if I then had wak'd after long sleep,
Will make me sleep again: and then, in dreaming,
The clouds methought would open, and show riches
Ready to drop upon me; that, when I wak'd,
I cried to dream again. (3.2.133-141)

「化物」「悪魔」とののしられ、獣性を保持したままのキャリバンではあるが、鳥の中に漂う音楽は彼にも心地よく響くのである。

難破にもくじけず、正直で、ポジティブな性分のゴンザーローには「何か歌声のような」(2.1.312)「不思議なもの」(2.1.313)に聞こえる音楽も、心の邪まな人間にとっては「不気味に」(2.1.308)響く。兄アロンゾーを殺害し、王位を奪おうとするセバティアンには「大地を揺るがすような唸り声」(2.1.306)のように聞こえる。過去に陰謀に加担したアロンゾーにとっては、自分の罪を告発しているように聞こえる。

O, it is monstrous, monstrous!
Methought the billows spoke, and told me of it;
The winds did sing it to me; and the thunder,
That deep and dreadful organ-pipe, pronounc'd
The name of Prosper: it did bass my trespass.
Therefore my son i'th'ooze is bedded; and
I'll seek him deeper than e'er plummet sounded,
And with him there lie mudded. (3.3.95-102)

島の中に響く不思議な音楽は、島に上陸した人の善悪によって様々な調子に聞こえ、彼らはそれに対し様々な反応をしている。

プロスペローの島は夢と現実の境界線が交じり合い、「夢か現か」(5.1.122-123) わからない、異界の島なのである。⁸⁾ エーリアルにまじないを掛けられて眠らされていた水夫長は、一瞬のうちに皆のいるところへ連れてこられ、その驚きを語る。

If I did think, sir, I were well awake,
I'd strive to tell you. We were dead of sleep,
And—how we know not—all clapp'd under hatches;
...
Even in a dream, were we divided from them,
And were brought moping hither. (5.1.229-240)

『夏の夜の夢』において、森の中で妖精に翻弄され、肉体的にも精神的にも疲れ果てて眠っていた若者たちは、目がさめて、何か不思議な力が働いているように感じるが、何が何かわからないまま呆然としていた。その若者たちのように、水夫長たちも眠りから醒めて、不思議な出来事を理解できず、夢の中にいるような、茫然自失の状態にある。アロンゾーはこの島で起こる不思議な出来事を体験し、この島が人知を越えた神秘の力の働く場所であると感じている。

These are not natural events; they strengthen
From strange to stranger.
...
This is as strange a maze as e'er men trod;
And there is in this business more than nature

Was ever conduct of: some oracle

Must rectify our knowledge. (5.1.227-228, 242-245)

4.

アロンゾーは自分の跡取りの王子を失った思いで嘆いていたが、今、エーリアル扮するハーピーによって、彼の死の原因が自分の過去の罪にあると告発される。

... But remember,—

For that's my business to you,—that you three

From Milan did supplant good Prospero:

Expos'd unto the sea, which hath requit it,

Him and his innocent child: for which foul deed

The powers, delaying, not forgetting, have

Incens'd the seas and shores, yea, all the creatures,

Against your peace. Thee of thy son, Alonso,

They have bereft; and do pronounce by me

Ling'ring perdition—worse than any death

Can be at once—shall step by step attend

You and your ways; whose wraths to guard you from,—

Which here, in this most desolate isle, else falls

Upon your heads,—is nothing but heart-sorrow

And a clear life ensuing. (3.3.68-82)

アロンゾーは自らの犯した深い罪が原因で、息子を失う結果となったことを悟り、自責の念にかられ、精神的に揺すぶられ、絶望の淵に沈みこむ。しかし、彼はその心の嵐を通り抜けることによって、人間的に再生することができるのである。⁹⁾ Joan Hartwig は次のように述べている。

With or without guilt, the characters undergo a suspension of perception in which their ability to see is renewed. Miranda's sleep and awakening is a simplified and innocent version of the "madness" and rebirth which the king and his group endure.¹⁰⁾

この島で現実にはありえないことを体験することで、知覚の一時停止状態を経験し、そこから醒めて、再生することができるのである。アロンゾーも最後には自分の非を悔い、プロスペローに大公の領地を返還することを約束し、許しを乞う。『お気に召すまま』のアーデンの森において、公爵位篡奪者フレデリックは、アーデンの森のはずれで出会った一人の老僧と問答を交わした結果、翻然と心を入れ替えた。同様に、この孤島は、過去の罪を悔い改めさせ、許しを乞わせることを促し、精神的に浄化する力を持つ場なのである。

5.

この神秘的な島は、プロスペローを助け、彼から "noble friend" (5.1.120) と呼びかけられる善人ゴンザーローにとっては「何も彼も揃っており、日々の暮しに事欠く事は」(2.1.48) ないと言うように、ユートピア幻想を思いめぐらす島に見えている。しかし、ヤン・コットが「この島はユートピアではないのだ」とさえ言い切っているように、¹¹⁾ 「腐った溝泥池」(4.1.182) という不愉快な場所も存在し、宮廷と同様の陰謀や策略が見られ、理想のアルカディアであるとは言い切れない。キャリバンは教化されず、獣性をもったままである。自由を切望し、機会を狙っては、プロスペローに対する造反を企んでいる。また、島に漂着して、試練を受けてもなお、心を入れ替えようとはせず、過去に犯した同じ過ちを繰り返そうとする悪人もいる。アントーニオはアロンゾーのように眠気を誘われず、目が冴え、王位篡奪者マクベスのように眠りにつけず、妙なる音楽を楽しむこともできず、精神的に癒されることのない悪人である。¹²⁾ 宮廷から遠く離れたこの孤島に漂着しても、権力や権威に対する執着は不変であり、眠っているアロンゾーを殺し、王位

を奪うようセバティアンをそそのかす。アントーニオーはこの島においてもその不思議な力の影響を受けることも、再生することもできず、最後まで全く悔い改めることのない唯一の宮廷人である。音楽に眠気を誘われ、夢を見ることができ、また、韻文でものを語り、最後には「これからはする事に気を付けて、勘弁して貰えるように勤めるよ」(5.1.294-295)と言える殊勝さをもっているキャリバンと比べると、アントーニオーは、文明の恩恵を受けているにもかかわらず、キャリバンにもおとる人間のように思われる。¹³⁾

このように『あらし』は“Happy Comedy”と呼ばれる喜劇と違い、舞台が島という不思議な磁場であるが故にすべて丸く収まる訳ではない。プロスペローは白魔術の体得によって全能者のような力を手に入れたように思われたが、そのような能力にも限界があることを彼は悟らざるをえない。そして、リアが嵐の荒野をさまようことで、自分もまた「二本足の獣にすぎない」という思いにたどりついたように、この白魔術に精通したプロスペローも一介の人間にすぎないことを認識する。そして、為政者としての義務を怠り、大公位を篡奪されたが、自分もその篡奪者アントーニオーと同じ血肉の人間であることに思い至り、彼を許すのである。

... Flesh and blood,
 You, brother mine, that entertain'd ambition,
 Expell'd remorse and nature; whom, with Sebastian, —
 Whose inward pinches therefor are most strong, —
 Would here have kill'd your King; I do forgive thee,
 Unnatural though thou art. (5.1.74-79)

グリーンブラッドはプロスペローの告白 “this thing of darkness[Caliban] I / Acknowledge mine.” (5.1.275-276) をとりあげて、“it is difficult not to hear in them [these words] some deeper recognition of affinity, some half-conscious acknowledgment of guilt.” と述べているが、¹⁴⁾まさにそのキャリバ

的な獣性を持っているという自己認識を得ることによって、精神的に成長することができるのである。悪人に対する激しい憎しみと許しとの間で揺れ動いていたプロスペローの心は落ち着き、この異界の島においても最後まで矯正することが不可能な悪人の存在を受容できる程人格的成長を遂げるのである。

Though with their high wrongs I am struck to th' quick,
Yet with my nobler reason 'gainst my fury
Do I take part: the rarer action is
In virtue than in vengeance: (5.1.25-28)

このように、プロスペローはかつては自分を陥れ、こらしめられても改心できない実弟をも許し、国政の責務さえゆるがせにして学び取った魔術を放棄して、ミラノの社会へと戻って行く決心をする。

6.

各人が遂げたその変容を見ていると、彼らが島で滞在する期間が数日間とも数週間とも思える。しかし、シェイクスピアにしては珍しく三統一の法則を守っているこの作品においては、舞台で展開する島での出来事はすべて、午後2時過ぎから6時までの間の三～四時間の間に終始していることになる。アロンゾーもゴンザーローもその不思議さは神のなせる業ではないかと感じる。

Alon. What is this maid with whom thou wast at play?
Your eld'st acquaintance cannot be three hours:
Is she the goddess that hath sever'd us,
And brought us thus together?

...

Gon. For it is you[gods] that have chalk'd forth the way
Which brought us hither. (5.1.185-188, 203-204)

この島は、時間を濃縮し、目覚ましい成長・変容をわずかな時間で可能にする不思議な世界である。ファーディナンドにとっては「ここにいつまでも留まらせて下さいますよう」(4.1.122)と願うほどの場所ではあるが、永遠に留まることのできる場所ではない。

『あらし』で遭難した宮廷人たちが上陸するのは、現実と非現実が交錯し、エーリアルや妖精たちが存在し、不思議な音楽が漂っている、絶海の孤島である。「在りと在る苦悩と試煉、畏怖と驚異、それがこの島を蔽っている」(5.1.104-105)とゴンザーローが言うように、彼らは、島でプロスペローの命を受けたエーリアルたちが作り出す様々な幻影に驚愕する。その中で恐怖・悲嘆の限りを味わったうえで、自分の力の限界を悟るのである。アントーニオーという唯一の例外を除いて、その試練を経て、自分の無力さを思い知り、自己を認識し、過去の行為を悔い改める。

And as the morning steals upon the night,
Melting the darkness, so their rising senses
Begin to chase the ignorant fumes that mantle
Their clearer reason. (5.1.65-68)

夜が明け、朝が来るように、試練を経た彼らは様々な面において成長、変容を遂げ、再生するのである。

もともと気高い精神を持つ誠実な青年ファーディナンドは、宮廷とは遠く隔たったこの島で、父を失ったことに対する嘆きから立ち直り、純粹無垢な素晴らしい女性に成長したミランダと出会い、“marriage of true minds”が実現する。この二人の結婚は単に男女間の結婚であるだけではない。それは、ミラノ公国とナポリ王国との国家間の結び付きでもある。¹⁵⁾ミランダへの愛

情を通して献身の心を持つようになり、人間的にも成長した彼は、良き為政者となることが期待される。彼の秩序ある統治は国民にとっても喜ばしいことであり、国家の繁栄が約束される。裏切りによって、大公の地位、領地を奪われ、追放されたプロスペローであるが、失った大公位を取り戻し、なお、彼の子孫にはよりすばらしい未来が約束されることになる。孤島で過去の罪を悔い改めたアロンゾーは、嵐で失ったと信じていた息子と再会することができ、遠い異国へと嫁がせた王女クラリベルの代わりに、ミランダという素晴らしい女性を娘として得ることになる。ミランダとファーディナンドの婚約によって仇敵同士であった双方の親は和解し、秩序の回復した新しい調和の世界、“brave new world”の誕生の期待を持って、それぞれの故国へと帰っていく。まさにゴンザーローの言っている通りである。

Was Milan thrust from Milan, that his issue
Should become Kings of Naples? O, rejoice
Beyond a common joy! and set it down
With gold on lasting pillars: in one voyage
Did Claribel her husband find at Tunis,
And Ferdinand, her brother, found a wife
Where he himself was lost, Prospero his dukedom
In a poor isle, and all of us ourselves
When no man was his own. (5.1.205-213)

『リア王』においてケント伯は “Nothing almost sees miracles, / But misery:” (2.2.161-162) と言っていた。¹⁶⁾まさに、不幸がより大きな幸福に変わること (*felix culpa*) を可能にするのがこの島なのである。

シェイクスピアは、『リア王』において荒野での苦悩を通して可能となった精神的浄化、再生というテーマを表出した。¹⁷⁾彼は、単独に書いた作品としては最終作となった『あらし』において、人間の悪を洗い清める働きをす

るという海に囲まれ、和解、調和、再生の象徴である音楽に満ちており、その音楽が平和の象徴である眠りを誘うという、絶海の孤島を唯一の舞台として設定することで、精神的浄化、再生を可能にする場所として強調しているのである。¹⁸⁾彼は人間悪の存在、そして悲劇的現実を実感しながらも、あらまほしき世界への願望を演劇として表現している。プロスペローの島は、寛容、自制心、改悛、和解をもたらす精神的成長を促す場として機能して、真実の愛が成就し、崩れ去った社会秩序が回復する“brave new world”の誕生の期待をもたらす場となっているのである。

注

小論は日本英文学会九州支部第54回大会（平成13年10月27日 於佐賀大学）における口頭発表に基づく。

- 1) Rosalie L. Colie, *Shakespeare's Living Art* (Princeton: Princeton UP, 1974), 286.
- 2) Paul Brown, “‘This thing of darkness I acknowledge mine’: *The Tempest* and the discourse of colonialism,” *Political Shakespeare: New Essays in Cultural Materialism*. ed. Jonathan Dollimore and Alan Sinfield (Manchester: Manchester UP, 1985); Stephen Greenblatt, “Learning to Curse: Linguistic Colonialism in *The Tempest*,” *William Shakespeare's "The Tempest"* (Modern Critical Interpretations) ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1988); Leslie A. Fiedler, “Caliban as the American Indian,” *Shakespeare: "The Tempest"* (A Casebook) Rev. ed. D. J. Palmer (Basingstoke, Hants: Macmillan, 1991); Alden T. Vaughan, “Caliban in the “Third World”: Shakespeare's Savage as Sociopolitical Symbol,” *Critical Essays on Shakespeare's "The Tempest"* (New York: G. K. Hall, 1998); Francis Barker and Peter Hulme, “Nymphs and Reapers Heavily Vanish: the Discursive Con-texts of *The Tempest*,” “*The Tempest*” (New Casebooks) ed. R. S. White (Basingstoke, Hants: Macmillan, 1999) なお、長年議論の焦点となっているキャリバンの解釈であるが、その解釈の歴史については Alden T. Vaughan and Virginia Mason Vaughan, *Shakespeare's Caliban: A Cultural History* (New York: Cambridge UP, 1991) [『キャリバン

- の文化史』本橋哲也訳（青土社，1999）に詳しくまとめられている。
- 3) Frank Kermode ed. Introduction, *The Tempest*, The Arden Shakespeare (1954; London: Routledge, 1990), xxv-xxxiv.; 川崎寿彦, 『楽園と庭——イギリス市民社会の成立——』（中央公論社，1984），56-76.
 - 4) 野島秀勝, 「キャリバンの悲哀」『自然と自我の原風景』下巻（南雲堂，1981），486.
 - 5) Kermode ed. *The Tempest*, The Arden Shakespeare. 以下『あらし』の引用はすべてこのテキスト，また，日本語訳の引用はすべて『あらし』福田恆存訳（新潮社，1983）による。
 - 6) 今西雅章氏はこの二人が初めて愛を告白する第3幕第1場が『あらし』の総行数二千数十行余のほぼ真中に当たると指摘している。「真中とは……「再生，復活」をも表すとすれば，この場面の構成上の位置は意味深長である。」と述べているが，この二人の結びつきが再生を象徴していると考えられる。『陰翳と変容のドラマ——シェイクスピアの喜劇と悲劇』（研究社出版，1991），336.
 - 7) Robert Speaight は音楽は “the instrument, or the echo, or reconciliation.” と述べている。*Nature in Shakespearean Tragedy* (London: Hollis & Carter, 1955), 167.; 藤田実氏は「智者・魔術者としてのプロスペローが，エアリエルの手をかりて，この孤島に「音楽」をくりかえし作用させ「調和」（harmony）をもたらそうと努める…宇宙を構成する音楽的調和の秩序そのものが，荒々しい海と激しい悲嘆の人間の精神を鎮めて，調和をもたらそうとする働きを示しているのである。」と述べている。藤田実編注『テンペスト』大修館シェイクスピア双書（大修館書店，1990），14-16.
 - 8) David Young は “As the enchanted island blurs the boundaries of the physical and the mental and confuses the waking and sleeping states, it also besets its visitors with problems of identity and belief.” と述べている。*The Heart's Forest: A Study of Shakespeare's Pastoral Plays* (New Haven: Yale UP, 1972), 175.; 一方，青山誠子氏は「この絶海の孤島——夢と現実の境のような場所——は，人間が平常現実世界で社会生活を営んでいるときには，理性や慣習や法律によって一応抑制されている本能や欲望や悪心が解き放たれ，人間の本性が赤裸々に発現されるのに絶好の場所なのだ。」と記して，この島が夢と現実の境界であるとしている。『シェイクスピアにおける悲劇と変容——『リア王』から『あらし』へ——』（開文社出版，1985），352.
 - 9) Derek Traversi, *Shakespeare: The Last Phase* (Stanford: Stanford UP, 1965),

245. Traversi は “the sense of loss is preliminary condition of recovery.” であると指摘している。
- 10) Joan Harwtig, *Shakespeare's Tragicomic Vision* (Baton Rouge, La.: Louisiana State UP, 1972), 158.
- 11) ヤン・コット, 『シェイクスピアはわれらの同時代人』 蜂谷昭雄・喜志哲雄 訳 (白水社, 1973), 324.
- 12) Traversi, 213. Traversi は “the sleep which foreshadows forgiveness and the healing of his sorrows . . . wakefulness, their inability to receive or understand spiritual refreshment” と言っている。
- 13) Northrop Frye は「キャリバンは生まれつき悪事をする性質をもっているにもかかわらず、好ましいところもあり、人間的威厳も備えている。キャリバンもまた、劇の最後にはある程度は立ち直る可能性があるように思われる。」と述べている。*A Natural Perspective: The Development of Shakespearean Comedy and Romance* (New York: Columbia UP, 1967), 110. 訳は『シェイクスピア喜劇とロマンスの発展』 石原孝哉・市川仁訳 (三修社, 1987), 152.による。一方、青山誠子氏はキャリバンの「結末における殊勝な態度の継続性は疑わしい」(400)とキャリバンの更生論に異を唱えている。また、野島秀勝氏は「‘wise’ や ‘grace’ という語にだまされて、キャリバンの高尚な変身を期待してはならない。彼はプロスペローの魔法による折檻がこわいだけなのだ。…プロスペローが魔法を捨てれば、キャリバンは「自然」のままに永遠に醜く歪み邪悪のままにとどまるだろう」(506)とさえ述べ、キャリバンの変身の可能性を否定している。
- 14) Stephen Greenblatt, *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England* (Oxford: Clarendon Press, 1988), 157.
- 15) David M. Bergeron, *Shakespeare's Romances and the Royal Family* (Lawrence, Kans.: UP of Kansas, 1985), 201.
- 16) Kenneth Muir ed. *King Lear*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1975)
- 17) 宮之原匡子, 「『リア王』—再生の荒野—」『英米評論』第15号(2000), 133-150.
- 18) 野島秀勝氏は「不協和音を和音と祝婚の和音に転化するためには、舞台は是非ともプロスペローの「魔法の島」でなければならない。」(489)と主張している。

The Function of Prospero's Island in *The Tempest*

Kyoko MIYANOHARA

By confining the whole action of the play to an island in the sea in *The Tempest*, Shakespeare presented it as the place of purification or regeneration, the locus of sea-change.

In this island for twelve years Prospero continued to devote himself to the study of white magic, while at the same time fostering Miranda to be a pure and wonderful woman. The mutual love at the first sight between her and Ferdinand, the crown prince of Naples, encourages to cultivate virtues of endurance and devotion. The “marriage of true minds” not only leads to the new auspicious relationship between Milan and Naples, but also brings the hope of prosperity and happiness of both countries. Experiencing distress and suffering in the island, the hateful enemies to Prospero, except for his brother Antonio, repent of their past foul acts and regenerate themselves. Prospero himself also undergoes spiritual growth, and he forgives even his incorrigible brother who usurped the dukedom of Milan and put him and his three-year old daughter to certain death.

Under Prospero's theurgical power, the island becomes the place of regeneration, enabling true love of the innocent young, repentance of the wicked through suffering, spiritual growth after discovering their true selves, reconciliation of the adversaries. Thus, a hope of the restoration of peace and order once destroyed is made possible.